



雲乃晴間雙玉傳

第三集

貳

^ 13
2898
12



門へ 13
2898
巻 12

文久三年七月長江戸着

格五冊之内

大幸

尾定

長喜門

近世新話 雲晴間雙玉傳第三輯卷之二

播陽 宮田南北編次

第廿三回 大村嶺小太郎父の仇と報む

此頃より播州加東郡天神町岳や由井の辺に年中の古凶とト
して。這里乎那里小徘徊する。紀觸と欽喚傲るものあり其さま
糸宜ふ似て身み白素千早とつらふものを着し。頭み折為
帽子と戴き白幣と首ふさぐ。秋の塵と威み似て手み
後調子と摺鳴せり。這者年まで若くして二十未満のものを
見ゆ。いづれ人物見ざらるる田舎人今茲の糸作りの吉吉いふ

又五傳三冊巻之三

昭和 九 四 日 録

あらしん聴べしと我もくし集ひたり。登首件の紀觸ハ右の手ふ
 鈴と振声高やう中臣の技とあげて曰く。
 高天原ふ神留坐と。皇親神漏岐神漏美の命とめて。八百萬
 の神等と神集ふ集ふの神議ふそりひて五口皇御孫の尊と
 豊葦原の水穂の国と安国と平げり。以上中臣のそひこれ豊葦原の
 皇朝の異名或ハ磯取盧島とも云へり。天地のまご開ざる時。渾沌
 する雞子のてり。溟滓て牙と含り。然して神とあす。號て国
 常上立尊と称す。また天御中主尊とまふす。神ハ即人の靈死し
 てよき清きものハ即昇て神とある。死しよき不清ハ迷るる
 即鬼とある。然ハあれども鬼神とも。凡者ふあらざるものふして

神靈あり崇あり尊くも五口天照太神ハ大日靈貴尊と号せり。伊
 弉諾尊の長女ふして高天原ふ御せり。国土と經營して人物と
 つくし。災ハ穰ひ病と療し。鑿蕨禁厭の方と定む。人皇の世
 及んで太神と尊崇し。日神と称たてまつる。吾神祖常陸の国
 鹿島の宮ふ祀る所ハ尊くも武甕雷命子とて一切庶民と愛惜志
 て。五穀の豊と与へる衆人知らずや。六根清浄の太後も。天照皇
 太神の宜く。人ハ即天上下の神物あり。須掌静とと謚べし。心ハ則
 神と明との本の主たり。吾あそ今茲の吉凶と這里ふらして云
 まく欲す。見者くくふ聴ねう。吐普加身依身多文寒言神
 尊刹根陀見。波羅伊玉意喜餘目出玉ふそれ農作の二故事ハ我大皇朝

の神代より。既すなは耕稼かうかの夏なつあるより。唐山とうざんありても炎帝えんていの時とき這夏このよあり。
 外紀がいぎ曰いく。古いにしへの民たみ草木くわうもくの實みと茹禽獸じゆきんじゆの肉にくと食くふ。いまいま耕家かうかと知し
 らず。炎帝えんてい天てんの時ときふ因よて地ちと相あく宜よく木きと剷き為なる。木き為なる未ま未ま始はじめて民たみ
 不あ教けう而して五穀ごこくと藝ぎし。藝ぎの藝ぎありて而して農のう夏なつと興おこす。農のうハ即すなは天下てんかの原もと
 あり。這夏このよありて世よの暗常あんじやうより尚なほくく。然しかるふ今いま茲このよハ初夏しよなつよ
 りして雨あめの降ふ夏なつ最たげく。五穀ごこく登あり至いたらざる。德とく輕かろくして色青いろあせく。
 此こゝ瓊雷命じゆらいめいの神かみ慮しよと聽きふ。今いま茲このよハ五穀ごこく凶あやくして半あふく。夏なつ旱あく。
 あハ声高こゝろたかふ云いをされども。這里このよハ富民ふじん多おほくも。ふ米穀まいこくと買集かひあつめ
 是これふよ。益えき々々困こむ。價あ一粒いちりゅう數かず金かねふ及および。まきふ饑饉きうきんふく。今いま般神はんかみの靈告れいこあり。貪民いんじんと憐あはれむ。不測ふそくの福ふくとさげむ。無福むふくの

民たみと賑にぎさんと欲あむ。今いま這里このよハ集あつて者ものふ。一ひとの秘符ひふと施おこす。是これ即すなはち
 鹿島かしまの神かみの最尊さいそんとも授あづかり。神かみ夏なつ不測ふそくの灵符れいふあり。是これと家いへふ。ち
 入り祈いのちへ黄金くわんごんと与あつ。賜たまふ尤なほ賽錢さいせんとむぎやう守まもり。諸人しよじんハ施おこす。祈いのちあり。ち
 近ちかくよ。つく受うけらるべし。這里このよハ那里そこと勸すすめられ。我われもく。一ひと手てと出い
 くと。秘符ひふと受うけらる。そのあつり。登のぼり。紀觸きふハ。ま。衆人しゆじんハ向むかひ
 て。い。今いま授あづかり。鹿島かしまの秘符ひふハ。皆みな是これ神慮かみしよのつ。祈いのちハ。必かなず
 灵功れいこうあり。尚なほ此このよハ。示しす。夏なつあり。衆人しゆじんハ。一ひとふ問とね。本天神山ほんてんかみさん
 棲すたり。一ひとツの惡竜あくりゆうハ。這世このよハ。居ゐて人ひとハ。皆みな是これ神慮かみしよのつ。是これ定さだま。相あ
 惡龍あくりゆうの所ところ為なり。這惡龍このあくりゆうと追去おひきむ。尚なほ此このよハ。上うへハ。害あやむ。為なる。是これと
 べき。修法しゆほうあり。我われ今いま衆人しゆじんハ。是これと教おしへ。來きる。九月十三日くわがつじゆじゆハ。稻成野いななりハ。集あつて



又 龍 橋 野 小 衆 衆

行 龍 橋 野 小 衆 衆
一 橋 野 小 衆 衆
一 橋 野 小 衆 衆



石 橋

110

悪龍と馳まへり。然まても悪龍ハ变化究りかきとものあり尋常
 あり追ぐごとし。价達皆々中合せ竹鎗と持簀笠と准構して十二
 日の朝寅の一天小稻成野へ来まへり。我自王領とあり。悪龍と退治
 て。万民の害と除ん然ハあまも此まへりハ衆人あても疑ひ思
 へん我今這里小奇特と見せん。すつくと立て懐中より。この玉と
 拿出せり。衆人よりいへまこと見る小晃々として元と放ち陰と
 して灵气あり。紀觸ハ衆人と左見右見てやや。此玉ハ往年。此天神
 山ハ国守の得まひ玉小似れど。その早国守の御手小おさまり
 すればそまらうの類小あらざる。夏云でも知まらる夏ありき。是此玉
 ハ尊くも天奎小亞べきものありて。尋常の亞流小あり守。これ玉ハ寶

器ありて和漢も小玉と以り。帝王の宝とす。皇朝の奎とハ坂瓊白玉
 と喚做て。天照太神の御時より。歴代の宝器とあり。漢土も又似
 る夏あり。西京雜記小曰く。漢帝相傳る小秦王子嬰の奉する。白玉
 奎と。高祖白蛇と斬の劔とを以てまこと。今此玉も玉奎小ひす。我今是
 等の宝器あらんべ。ゆり鹿島の神慮を得ん是のありて此外ハ一口の名
 劔あり。これも又簀上不得まひ。天裝雲の劔小類も。是等ハ問まらる
 小似れど。云てハ价達我力と疑ふものをありあんと思ふ。かくて
 講じらる。いさや衆人小悪龍の形と頭一見とて。邪宝玉と左小持石
 手小名刀閃りと。後執天小向て數回念とて思へ。あつ不測や。忽然として
 黒雲地より起り。雷又隸とて一朶靄雲。天より天引降りて。電光最

凄しく風亦さつと音く来つ石と巻砂と飛して草木と靡き鳴動
み或ハ明く或ハ闇く。雲ハ漸々小廣くあり。見りて一天暗常の夜の
どく人目もろくすあり。何所ともあり。一の悪竜頭を來り。
大きき數十丈の白龍頭の兩角ハ鹿木の如く。見々と光りしつる
兩眼ハ赫々として日月と並べり。西ハ飛東ハ走り。或ハ去
或ハ下り。氷の如き息と吐劉累ガ龍と飼くとき。禹王黄河と
渡り日もあざく是れあまきし。見る者胆と消し。魂と失ひ。
右姓左姓小遊るも多く扶け多くと罵り多し。此時件の紀觸ハ那の名
劍と鞘ふ収め玉と錦の袋小容て口小咒文とあり。されば須更や
て風ハ坊さまり雲晴て傾き入る山の端の日影迷ふのころり。不題

大勢の見物人焦る奇特と見るより。秘符と求るとの益多し。日西
山小傾く。夕されちろくあるや。那紀觸ハ舖と止て。つづくも無
去りされば衆人もちろく。己ガ家地小去り。是より那紀觸
ハあちあちと觸て歩行。龍のきどくと見せしむ。感信せ
る者一人もあ。皆稻成野へ集らんと専ら準備とあり。つる
誰ら知らん此紀觸ハ蛟倉紫花ニ即行竜あり。其後小那秘符と
買し者の家小軒下小夜中。小黄金一兩つ。人知し子置て廻され。
衆人あり。信じて是備小鹿島の神の民と恵ませるふあり。
つよく神慮小まうせつ。稻成野へ集りて悪龍退治とあすべし。
まね者もあ。焦るまると夢も知らぬ。天神山の城主あり。

蒲上大學連形ハ這九月十三日ハ三木の生姓子祭禮カ多バ。いつく
出勤あさんともいふ。十一日より供觸して。十三日の朝末明より天
神山と出立せり。行程僅小五里不足らねど。早く行人と思へばあり。豫て
稻成野へ百姓の集らんといふ。夏ハそが村々より願ひ出て。悪龍と駈
んとつへ。是又召べきあね。心まうせふも。うら。原來大學が供
小延々侍士分。鳥賊推落太郎。泥見土太平。板足羽即。龍餘九
即内。是等と宗徒の者。うら。延く供奉三十許人。三木の方へ。心う馬
の蹄と。とや。や。案某下。休題。爰ふ。ま。名古の小太郎。忠孝ハ父母
の仇。ある大學と。いつく討人と思へども。いつくそのありと。得ど。心うの
脅と。喪引。この心。地と。表ハ病氣と云。あ。ら。書心の。いつく

かきて。嘆息の。小日を送り。心の内。不思議。免ても。角ても
此。終。あ。く。仇と。何。ま。の。日。報。せん。と。う。ら。小蒲上大學へ。今日ハ。館
さ。ま。の。人。出勤。せん。と。必定。せん。某。乙。半途。小埋。伏。して。父。と。母。との。仇
と。報。せん。彼。ハ。元。より。老。臣。あ。ま。侍。士。も。駈。せ。り。そ。が。供。衆。も。多
かるべし。雷一名。ま。這。大。敵。と。猜。討。ん。の。蟻。螂。の。立。る。車。小。向。ふ。似
て。最。危。う。る。夏。あ。ま。と。も。討。果。さ。ず。不。孝。あ。る。べし。元。より。捨。る
命。あ。ま。死。す。と。さ。ら。小。恐。を。と。せ。り。噫。恸。あ。う。と。思。案。し。つ。十二
日の夜。の内。より。准。備。と。あ。り。て。立。出。り。小。太。郎。這。日。の。身。作。小。肌
小。南。蛮。鉄。の。瑣。袍。と。透。間。も。あ。り。着。下。し。上。の。白。き。麻。の。二。重。衣
と。着。て。向。脛。高。く。腰。と。か。り。げ。黄。銅。篋。の。拵。刀。と。小。尻。さ。り。小。横

えつ。白き布と以て後頭固楚とあり穂のりより四尺あまうり
 大身鎗と提亭子首頃小舟家と出さう。奴隸カニハ豫てより、大
 郎が氣色と見て早くも其意と察し、これバ徳云と止まども、小太郎
 毫も聽のまを、你知らずや古人も云へり。父の仇を具ふ天といさう
 まさといり。浦上ハ父と母の重敵。いつで見のぞくあぐべきや。那死むハ
 我死のぞく、恐るゝ夏やと吐りつ。袖と拂うて立出さうが心の内小思ふ
 かり。はらう地理と考ふる。埋伏して敵と待た。大村峠をあぐて居。
 那地ハ右樹木繁り九折ある儉道さう。南廡ハ大村前北ある魔ハ極持
 あり。進退とも小うけいさう。思ふ浦上大學ハ騎馬さう來んと
 必定あり。そが供まらうも侍上ハ馬上さう來るべし。這方ハ僅小一名

あぐ。あうも是歩上あり。万端不便ありさう夏あぐ。首言第一小
 浦上奴と。鎗小突伏べし。然らば、丹它の者侶ハ討とて及討さうとて
 遺感と思ふ夏よりあり。とてても全き勝利ハ得さう。一遺浦上を
 突さうあうべ心の望足りしとせん。胸小問胸小答て喘ぎく。大村
 嶺へ登りつ。四方を眺と見り。こまらう。あうのぐらうさ丑のあら
 けい。最との冷き澗水の。こまらう。寝あや山ふところふ心づく
 り。音一名樹さうの内小忍びさう。余程小あや。と其夜もすて
 不明さう。巢とある。諸鳥のさう。さ決り。丈夫がま。と思ひ出
 す。父母の仇と今自あ人報し得。具小眞土へ趣きて。心さう。の
 孝道と盡と思ひの深計肝胆。碎けく落る玉水の。流果敢あき

ともあつと嘆息の外あつたる。怒り。わらふ小太郎の蒲上が
 來ると今欲々々々。待とも知らぬ大學の從ふ胴勢のつら。泊置
 の陣笠の羽織掛脩刀の立派あるも。民の油と泣く。あらん思へ
 ば又あまも席ふあらず。小軍と子ぎ宮脇と越榎村と跡小あ。大村峠
 ぶか。せらる。這地や三木の北山や。北山比叡の險と帯。見上ま
 奇岩突然。包丁の刻。見下。澗水。青洋あり。
 鼓と調あす。似。絶頂より見渡せば。南。漫々。青洋あり。
 是。阿波の海あり。西。清々。長流あり。是。美濃川の
 流。東。巍々。高山あり。是。丹生の古城あり。詠
 ともあらず。畫。あ。ぬ。山。山の形勢。繁地。風雅。

て。三木の城も眼下ふあり。大學の馬と進み。既。頂。上。り。來。つ。四方の
 景色と詠めんと。馬とひらりとあり。立て。程。よ。所。校箱と立。上。り。
 つ。腰打。け。霎。時。景色と詠め。わ。り。小。太。郎。の。樹。の。間。より。此。あり。
 さ。ま。と。見。る。よ。り。も。天。の。あ。と。と。よ。ら。ら。び。い。さ。後。の。方。より。窺。
 よ。り。呀。と。う。け。る。声。と。と。の。ふ。突。出。る。手。練。の。穂。さ。大。學。路。
 と。健。ふ。突。貫。を。港。り。得。む。後。へ。と。倒。る。所。と。得。る。と。小。太。郎。
 飛。か。と。從。ふ。待。泥。見。土。太。平。臙。餘。九。郎。の。曲。者。と。さ。人。あ。れ。何。
 由。ふ。や。と。罵。り。あ。へ。ず。中。小。隔。て。小。太。郎。透。間。も。あ。く。切。付。と。小。太。
 郎。閃。り。と。飛。の。ま。曲。者。と。鳥。許。か。ま。我。名。を。聽。て。驚。く。緯。な。
 う。れ。注。七。月。廿。七。日。蒲。上。大。學。が。奸。計。ふ。あ。ら。う。切。腹。あ。き。れ。名。古。



いそがしき
うらなふり
おちて
大司馬
其仇大軍と撃

又 劫 奪 三 輪 山 寺

十郎忠邦が二子同苗小太郎忠孝あり。それのそかして生年。撰
 州より母袖篠も。大學が良等ある。割田五太平ふ殺されう。父と
 母の仇あまほ窺ひ奇て突止う。這上ハ汝等も。此世のいとま取
 してとれんと。ひらと身と踊らして首大學が乗らう。馬と
 引よせ飛のりつ。鐘といねつ。突て菟まば泥見土太平毫も擬議せ
 ども。奴隷ふ持せ。鐘あつと。鞘ととづとてやうりと。引あごき
 つ。突向へハ。臈餘九郎内。板足羽四郎鳥賊搥落太郎們。刀と抜てすき
 間もあ。切て菟まば小太郎ハ隻ともせず。四人と相手ふ必死の働さ
 上段下段虚々實々進んが突退ひく當り。まごふられ海の竜
 浪と走り。山林の虎岳と穿つ勢ひあ。四方ふ當り。瞬丹ふ鳥賊

槌ハ脇腹丁ど突通され馬よりとらうと落太郎。霎時息ハ絶ふ。三
 人の是と見るようも。ま。進んが戦う。あひまふ。從卒們走
 り寄て大學と。かり。扶け。乗物ふ打の。三木の方へ。一
 らんとま。つ。天神山より早馬來り。息續あへ。大學ふヤ
 ち。君早くかへらせ。御本城あ。昔う。大騷動出來せん。
 其所以ハ加東半郡の百姓ども。稻成野へ寄集り。悪龍と追んや
 皆々蓑笠竹鎧。集り。人數畧一万五千許名。猛可ふ。どらや
 聞と作り。天神山へ押寄。つ直ち。城と責取て。あ。頭領ハ二
 名あり。一名ハ嚮ふ。曾古が推挙せ。蛟倉紫它二郎と喚做者。
 及一名ハ品曾古が娘あり。巽と喚做女あり。早々かへらせ。又

又三傳二編卷之二

いつある大變ふ及ばんもろろろがらうろ。我らも城ふ止りゝあまど。
賊の為ふ追出され是まで來りいこと涙とどりのふろろろろろ。大
學の怒と閉よりろろろ驚き息絶入る。大地ふどろろと打らる言
ゆもろろろろろろろろろ。板足羽四郎。泥見土太平。朧夜九郎丹是と
閉より大驚き猛可ふ刀法乱まろろろろろろ。小太郎得ろろろ付入
て泥見と馬より畜一突ふ撞て落せバ开它の兩名かろろろろろ
思ひろ人跡とも見ずふ天神山の方へ馬と飛して逃入る。小太郎の
是と追む。浦上の何處へ逃るろろろろろ。四下と見まろ大學の大松
の木の下ふ反ろろろろろ。倒れろろろろ。此時加東の大變あろろ三平
許名の供卒們へ一名もあろろ守逃去て。大學一名倒れろろろろ。小太郎

傍ふ進み寄り引起して活を入られバ痛手あまるとも大學のまど死
きろろろろろ居ろろろろろ。云とろろろろろ。息吹ろろろ。小太郎と見る
よろろ。勃然として大に怒ろろ。今般賊と申合。我と怒あて
害せろ。大不忠の癖者ろ。かと云せも果む。小太郎ハ呵々と笑て
云ろろろ。大胆ある悪人が雑言ろ。某はいつろ。賊ふとせん。一々這首ふ
演ずろ。吾父母と殺せろ。皆ろれ。汝が為所や。て嚮ふ割田土太平
が云ろ。と以て知ふ足まろ。汝自ら肚ふ問ろ。我あろの刀の首ふのむむ
と合傷と称ろ。相侍べ。いせ立上りて快く勝負せよ。ろと罵れ
バ大學まろ。怒とろ。刀と拔ろ。立向へ。小太郎ハ得ろろろ。やあを
長柄の鎧の双頭すろ。刺蒐る。千變万化の働きろ。大學後へ倒

とく所と鎗投棄て小太郎の飛かつゝる飛蝶の早業のやゝかつゝ
下組伏白刃拔持胸元ふおしあてら大音ふ罵りのふやうやう
大學たしうふ聴今こそかへも父母の仇多日の恨思ひ知まこと言
く十々滅の一乃さすづの浦上も呀と叫び虚空と掴んぐ息え
ころ

第廿四回 土寇の大兵首夷成塾小聚ふ

登首しも小太郎へさも嬉しげふ立あづる。浦上が首と打落し。
早懐より取出すん父と母との位牌あゝ柴さり布て二の位牌と。
恭々しく立並べ折や一咲一野の菊と手抗く立る至孝の手向の
水と細谷の流と及でろぎとる手とろきあへむと掌と合して涙

とろりくと。袖めてしがる勇士の哀傷。生るがてく位牌に向ひ。
南無頓生灵魂菩提。俗名名古十郎大人母袖篠大人。今日口、今仇
あつゝる浦上と討取ひあり。靈魂這土ふまゝ哀愍納受
あまうしや。浦上が首と恭々。位牌の前ふ立るころり。其時
小太郎忠孝へ腰ある畧硯笈とら出つ。徐ふ書や書置の雄麻の
角の束の間もあゝさあき世のあゝひありふ。まゝてや是は壯夫
の。今日と限の死出の道筆の足本早書も日頃ふ信してようりる
其文ふ曰く

恐々惶々以愚札御家老の尊前ふ告奉る私義先祖より
代々国守様の御扶知と戴き洪恩へ海より深く見上げ

須弥より高し。今般父考十郎蒲上大學が奸許にあつる。且將玉と亡ふる罪ふ因て先ふ白刃ふ伏罪然るふ大學猶奸暴と逞やくと割田五太平と以て母袖條と擾州ふ亡るゆい因之具ふ天と不戴の冠あるとめて国守様の御怒と顧むと雷一人此所ふ埋伏して仇と報い畢ぬ希へ一死と賜へ只る国守様の大恩ふ背きい段不忠不義奉忍入い謹言

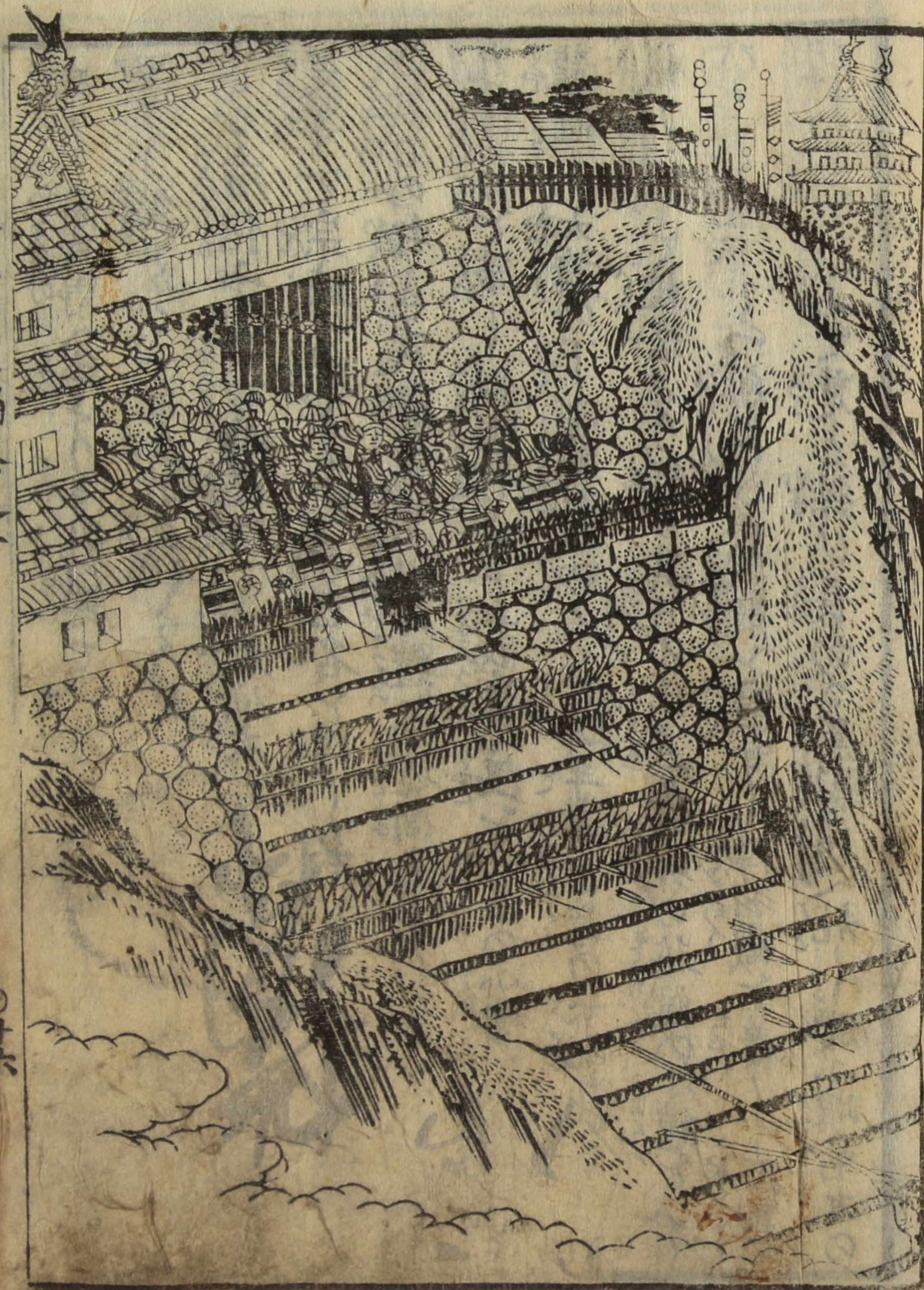
かくのくわいふ書認め豫て覚悟の小太郎へ両肌と脱奪つ刀と抜く鋒と一寸むろりあつて白布と以て鈔元まで透間もあつて巻立つ南魚阿弥陀佛の言とも。やめら腹へ刺立んとする

後よりやよ待あぐりつふとあり待よくと喚止る馬の蹄と早めつ。阪と上りふ来る者あり。小太郎の後まきふあつて待と声かけらむ手と止る是と見るふ年の頃五旬むろり。見え黒皮緘の大鎧と着し。頭ふ挑実の兜と戴き白き馬の太く逞きふ紫の厚総つけ手ふ大長刀と提げつ背ふ指する指とのふ鷹の羽の紋付くろり云でも知るを搜並仲之進春次あり。小太郎見よる頭とさげ。ろり思ひうけあつて搜並さま甲冑騎馬あて出玉ひら加東の逆徒と静めんろり向をせ給ふと見へ侍る心得ろりろり只一騎ろり。何れ士卒と召あらずやと問ば仲之進馬より飛下り。今しも加東より住進あり。諸卒のろりろりと相待あつ

又三傳三編

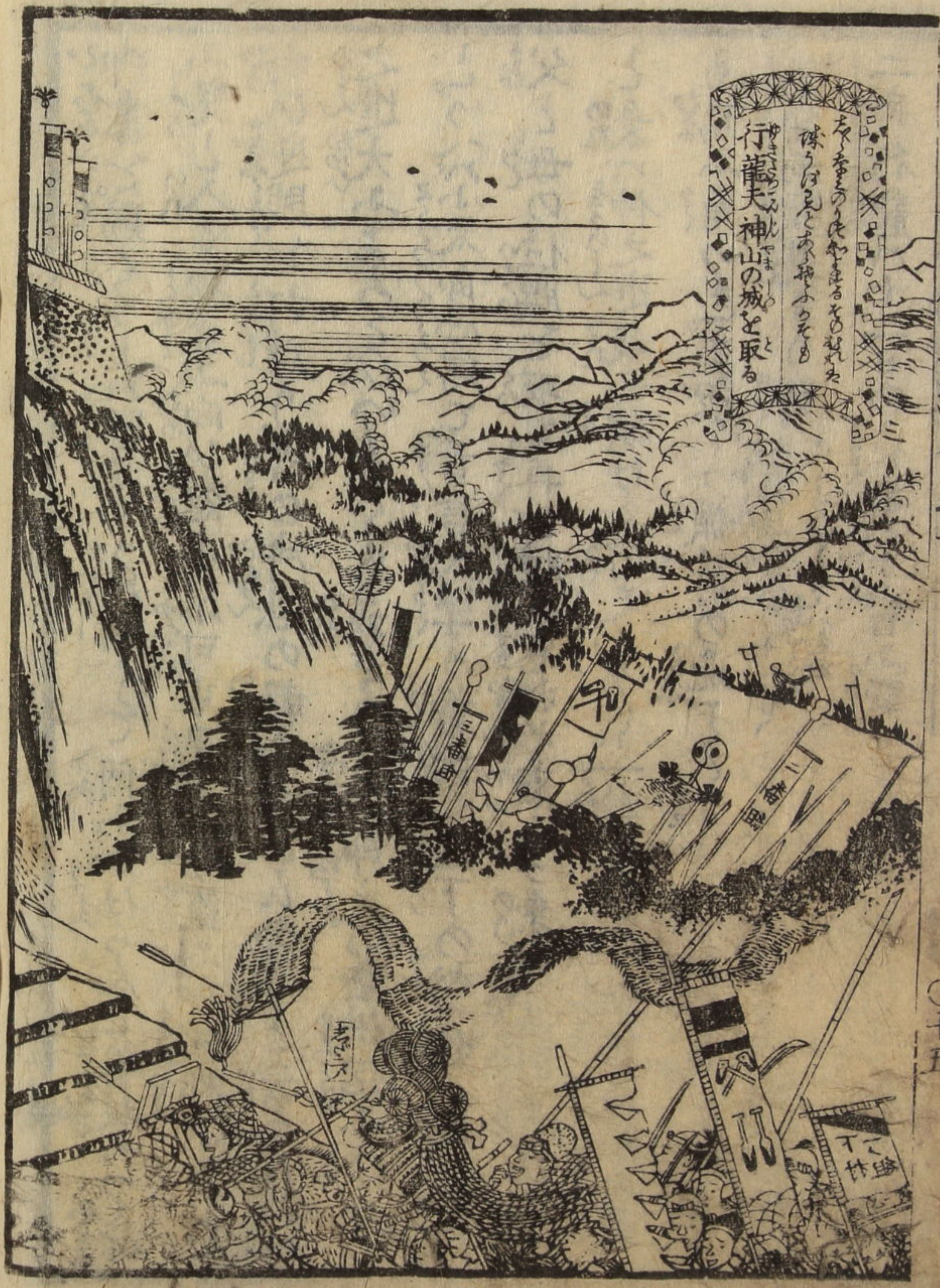
追々跡より追付來るべし。和主が這里より大學と討取らう
 とつて下も同時三木へ聞へらう。浦上大學の豫てあり。奸智
 と逞くして民と損ひ和主が父母を殺せしつて下も遂我君の
 御耳不達しつて因之我君も深く浦上と憎ませ多し折もあ
 らば大學と亡えんと思召しつて抗つて僥倖和主が働き只一名少
 憊大敵に討得しも又妙ありつて感状と敵討の赦書とを給
 せしつて我も又憊つてこの有んと思ひつてゆへ小童一騎駐付し是
 見らしとよと豫らう。二通の文書取出つ。遞とせむ名古小太郎の思ひ
 がけあき不勝のよろこび俄ふつとちと改めつ扇と開て恭しく二通
 の文書を拜受し早打ひつと讀終り小踊してやや我君は

御書を賜らる上へいつぐら死して何もう仕らんと巻収めつ豫
 ふ楚と入る擾並ふ向ひ愿ふ小可も是より直加東郡ふりけ
 向ひ逆賊と打破り君の御息の報じつていありと云られれば仲
 之進大ふよろこびいつて云らう小太郎主の供侶ふ急ぐん
 といへば小太郎心得て首言大學の首級と四下の松が技ふけ置け
 父と母の位牌と取て再び懐ふ巻収め浦上を乗し馬引寄ひら
 と乗バ仲之進我ふ續けと呼せらう。一鞍をねく馳出せば小太郎
 も馬小角のまさあぐら獵箭の飛下り北のうらんと馳らうらう
 話分兩頭是より響物話後へ戻り十二日の夜の更あり小太郎が
 二郎行龍の十二日の夜亭子皆ふ異とせしめ鯨江守難等と引



又玉守三編卷之三

〇十五



又玉守三編卷之三
行龍天神山の城と取る
友香のうたやまのそとに
疎らに人くちりけりそと

又玉守三編卷之三

〇十五

卒。夷成野へ出らるれば、疎て約束せし属下の小倭羅。這里那
 里より集りて、一百余ふ及びらる。就中小倭羅の内、名と知られ
 たる者、侶み、吳古狗高内、貪着仙太、突足弥津太、小貝瀬話四郎
 是等と宗徒の者として、开它名と得し者、數夥あり。不題行龍
 其日の扮立ち、身衣紫緞の鎧と透間もあき、着下し雄竜
 丸の名刀と帯し、鋤形打らる五枚重の盛と一名の小倭羅ふ持せ、丸
 龍畫し大旗の下、小將札ふかけ、右の手ふ金篋の采配あらし、威
 儀を正して控居らる。異が其日の出立ち、大卵の花緞の小鎧とひ
 ひくと着下し、緋羅沙ふ蛟龍と緋せし陣羽織と着し、赤銅の
 瑣頭固と後わて楚と結び、長ある黒髮、後へ乱し、腰ふ雌竜丸の

名刀と帯し、右の手ふ長刀おとし、蛟龍畫し大旗の下、小將床
 ふかけ、控居る。其它、鯨江、濡九郎も鎧兜とひくと着下し、そ
 が妻、宇薙も鎧と着て、濡九郎と一様、扮出らる。登首、蛟倉行
 竜の衆人、み向ていふやう。某し既ふ忍の者と以て、窺せし、天神
 山の城主、蒲上、大學、翌末、明より三木へ行し、其虚ふ乗て、那城と
 責取べし。然らば、あれども城ふ残り止る者、猶夥あるべし。異の宇薙と
 先鋒として、大手より責かゝるべし。某し、鯨江を先鋒として、搦
 手より不意ふ起り、一挙、小城と乗取べし。百姓共の集りしとして、
 容易ふ策と擧るとあられ、期ふのぞき、某しが行ふべき手謀あり。
 這度、三木殿へ來へば、必ず討手の軍勢來らん、常口、口ふ、口ふ、口ふ

先んずれば人を制し。後すれば人ふ制せしむ。一挙ふ天神山と
 責取とも。那城ふ士卒とのりて止め置此方より逆寄ふ推寄べし
 一木よりの援兵と一回打破り。わどあらば味方の勢ひ大ふ
 震ふ。近郡と畧せん。汝達此義と心得る。欵示す言ふ
 大勢ハ頭ときげく一同ふ雄龍頭領の神機妙算。小可等が及ぶ所あ
 らずと皆万世とぞ称し。多う。恸る所忍びの使追々ふり来つ蒲上
 ハ既ふ今朝よりして。三木殿へ出勤せんと天神山と打立と。と告ると
 問て衆人們ハ嬉び勇んぐまつと。夜も早明と近くありて。
 追々ふ集り来る百姓畧一万余人皆箠蓋ふ竹鎗と持我ゆくと集
 り。うぶ。さしもふ廣き夷成野も。歎地も。立並び。折ると九月

算の並び出。う。う。あり。其時較倉行竜ハ下知と傳て小僕羅ふ。ハ
 金箱より。數千兩の金と拿出。分子へ。ア。ア。ア。ア。
 今般俊達と集。悪龍と駈んと。詐り。登實ハ天神山の城主大
 學と云大悪龍と駈七人と思ふ。あ。吾々今俊達。蒲上。悪
 と説関さん那ハ原浦上の一族。三木殿の推臣ある。平日
 小三木殿と茂。且百姓。多。果役と。け。ハ。皆俊達
 が知り。る。夏あり。今茲ハ米穀の最不登。ある。大。學。悄々。地。不。富
 民。曰。付。米。と。買。蓄。と。甚。是。不。因。て。米。ま。り。高。く。あり。
 万民饑饉。及。んと。守。恸。悪。人。の。大。學。あ。る。生。置。あ。る。後。々。ハ。又
 ま。つ。つ。ある。悪。と。ユ。俊。達。と。苦。人。と。必。定。せ。り。今。般。頭。領。倉。公

民の為に大義の師と起し。大學と亡さんと欲し。嚮ふ紀觸とありて。俊達と誘ひあり。首言當座の賞として黄金と賜ひあり。いよく夏成就して大學誅ふ伏し。あが賞錢は多く取とべし。是頭領の私心あり。守實に困民と憐れ思ひ。うらやみあへ人皆々這義と心得。中て蛟倉頭領の御為に力と盡し。功と激んで。悪人退治あすべしと。さり仁人らしく。觸らざれば百姓どもは是と閉て。或は驚くものもあり。或はよろこぶものもあり。賢々としてかまびすし。登時行龍。翼門に豫て准構の馬と牽せ。手總ひ拿ひらうと。飛來那九龍と。蛟竜の大旗と。真先ふ推立さして。天神山へと墜と立て。整々と推て。行勢ひまきふ。播北ふ震らる。當るるも見へざらう。此時天神山

の城あり。大學既ふ三木へ出仕し。そが妻ある積宵草と。守護さる侍二百余人。城と守つて居らう。いづか。焦る度との夢ふり知らず。大學が妻積宵草は。深溝頓太夫といふ。老侍と近く招き。いづか。ある大學大人へ。今朝より三木へ出仕し。いづか。今頃へ御前ふ。いづか。て。殿の御機嫌も窺ふ。いづか。あはれ。今茲の悪龍と退治せん。と夷成野へ集りて。那里で其行ふ。いづか。と村々より願ひ出。今日へ即其日ふ當る。いづか。願ふ。いづか。行て悪龍退治する。と見ま。いづか。思へど。あま中。いづか。さへ。慎ま。いづか。今日へ夫も留王。いづか。俊達們も。いづか。る。いづか。秋の心。いづか。慰する。いづか。酒。いづか。心得。いづか。

又三傳二節天

二二

又玉傳三編卷之二

准構とまねと。辞ふらつと應へし膳まらりの侍みや付つてまらや
酒肴と所歎まで持出さる。積宵草のよるこびて女中辺目と
召集へ早酒宴とまらめらる。去あるとふ筋の廻りて数つ
る。酔と盡さぬ者もあく。最あまらきて見へるる。

舟橋
玉傳

近世
新話
雲晴間雙玉傳第三輯卷之二終



